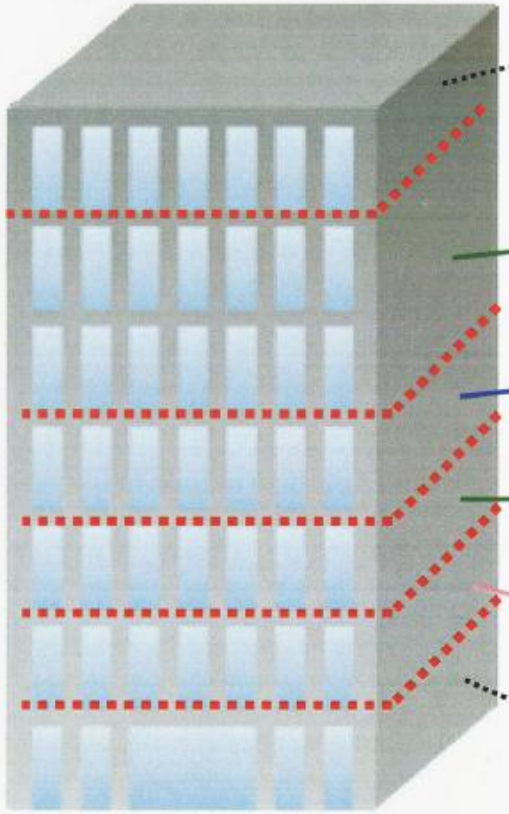
4 復興へ向けたご提案

「安全・安心で生活上の利便性が高い複合施設の開発」
～生活に欠かせない社会インフラと対災害インフラの両機能を集約～

住居・医療・介護・生活の複合施設計画イメージ



共用フロア＋非常食備蓄倉庫
（災害発生時は地域住民の一次避難場所として開放可能とする。スペースが大きい場合は、石巻市の非常食の備蓄倉庫を設け、更に災害対応拠点の機能を強化する

高齢者専用賃貸／住宅フロア

医療モールフロア

介護施設フロア

保育施設フロア

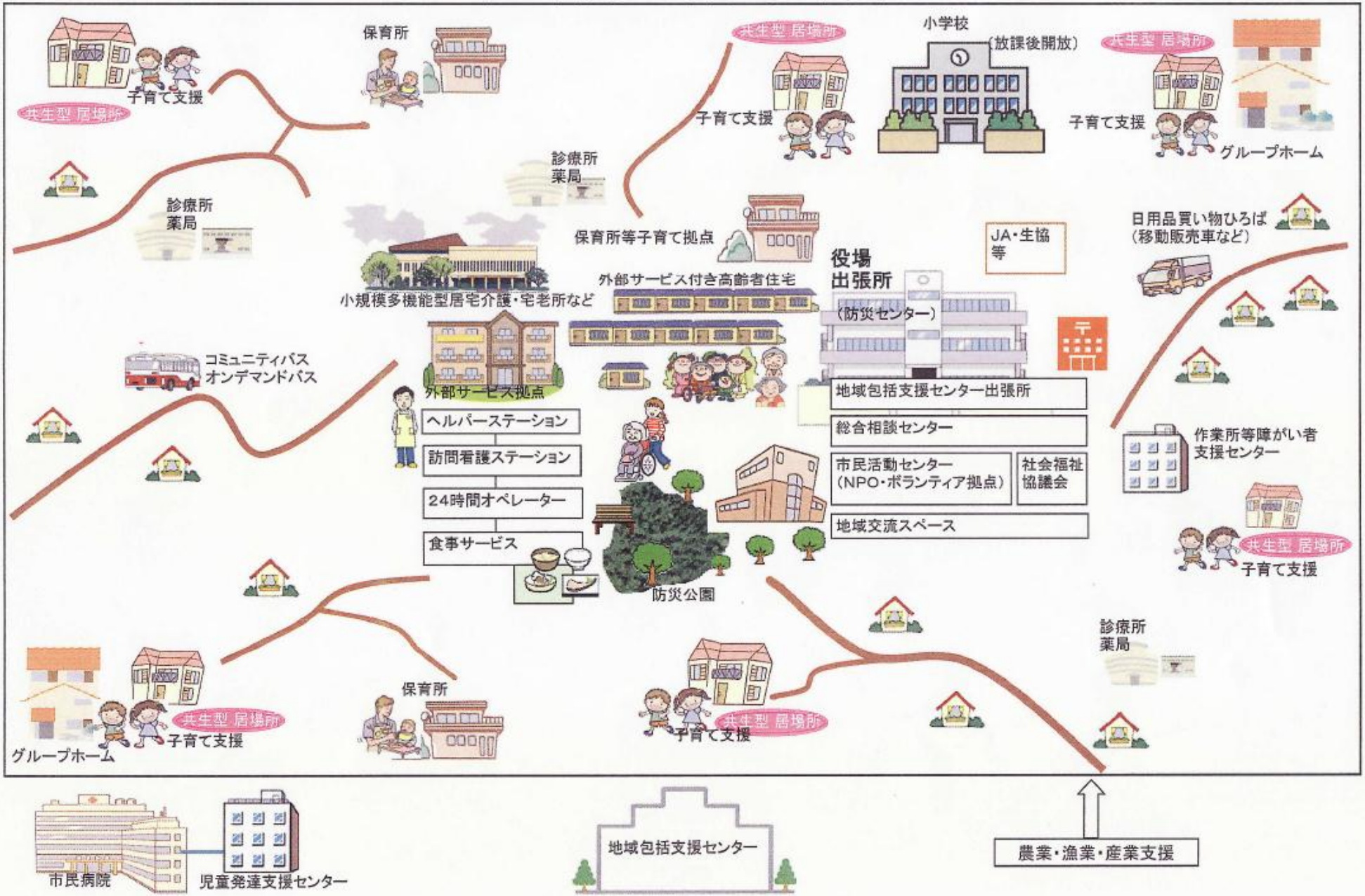
スーパー・飲食店フロア

Copyright © 2011 Nichii Gakkan Company. All rights reserved.

2011年5月12日版

すべての人の尊厳を支えるために～ 地域包括ケアの町イメージ図

（3000人から5000人のコミュニティー）



イメージ図の説明

1．この図は、**最後まで自宅で暮らせるまち**を表しています。
（1）一人暮らしで介護が必要な方は、まちの真ん中にある**外部サービス付き高齢者住宅**に入ることができます。
（2）そこには、近くにある**外部サービス拠点**から、介護、看護、食事など、必要なサービスが、２４時間３６５日届きます。
また、診療所から医師が出向きます。
（3）だから、その地域に大きな施設や病院がなくても、最後まで自宅で暮らせます。
（4）高齢者住宅の近くに子育て拠点や交流スペースなどがあり、いろんな方と交流できます。
（5）なお、外部サービス拠点は、家族と同居している高齢者などにも、必要なサービスを届けます。
（6）高齢者に限らず、移動販売車などによる日常品の買い物サービスや、自由に要求に応じるコミュニティバスの移動サービスが提供されます。
（7）地域包括支援センターの出張所では、高齢者や障がい者の医療やケアに必要な情報が集積されます。

2．この図は、**社会全体で子育てするまち**を表しています。
幼稚園と保育園を統合した保育所（こども園）で、幼保一元が実現しています。
人々が集い、交わる居場所で子育て支援も行われます。
小学校の校庭は、放課後、子どもたちやまちの人々に開放されます。

3．この図は、**ひろく就労できるまち**であることを前提としています。
外部サービス拠点は、多様な就労の場をつくります。
障がい者それぞれの能力を生かす職場をつくるよう、まちぐるみの努力が求められます。

4．この図は、**住民がつどい、安らぎ、交わり、能力を生かすまち**を表しています。
そのためのセンターや居場所が多く設けられており、そこで、助け合いも生まれ、まちづくりの智恵や協力も生まれてきます。

5．この図は、**モデルとなるイメージを描いたもの**で、これを一つの参考にして頂きながら、それぞれのまちの状況に応じて、住民の意見に沿ったまちをつくることが大切です。
たとえば、観光や文化の点で特長のあるまちにするなど、**日本最高の魅力あるまちに復興**してほしいと願っています。
そして、絶対に欠かせない目標は、**すべての人が尊厳をもって、その人らしい暮らしができるまち**に復興するという理念だと考えています。

中心市街地改善のための方策 《提案》

＜5つのテーマ＞

1. 誰にでも優しい街
2. 誰もが楽しめる街
3. 災害に対応できる街
4. 便利な街
5. 誇りを持てる街

＜改善のための方策案＞

A.新たな都市骨格を創り出す

B.防災と魅力づくりを両立させる

C.明快なゾーニングで特色をひき出す

D.公共公益施設の集約・再配置を行う

A.新たな都市骨格を創り出す

□歩行者の為のまちの中心軸を創出

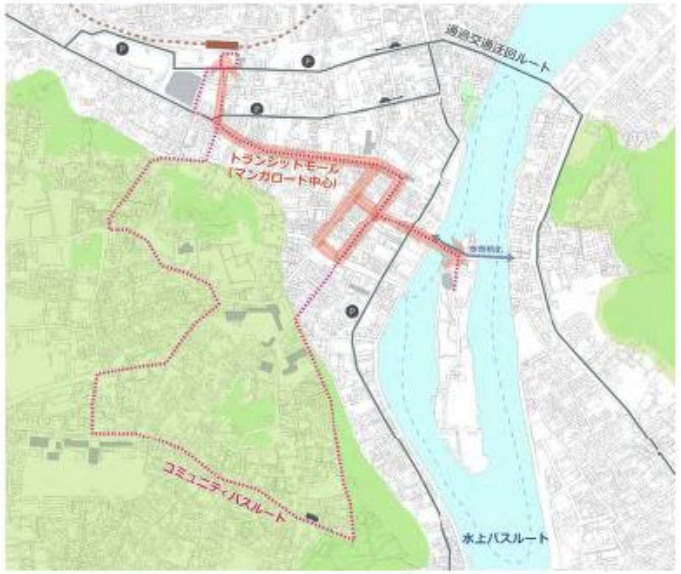
歩行者が安全・安心にまちの回遊を楽しめるよう、石巻駅～アイトピア～マンガッタン島に至る賑わい・観光の軸を新たに創出する。

その為、既存車両動線を北側に迂回して確保し（新たな橋の整備）、中心地はトランジットモールとして環境負荷の少ない新交通システムの導入を行う。

□駐車場の集約化

石巻中心市街地には、商店街に面する部分も含め多くの低未利用地（駐車場）が存在する。

これらの土地を有効活用し、通りのにぎわいを活性化するため、駐車場を集約化し復興計画における共同建替の種地等に活用する。



B.防災と魅力づくりを両立させる

〈被災からの教訓〉
・地盤面の低い平地が広範囲に渡る
・将来の津波被害を想定しきれない

〈住民の意見〉
・石巻は歴史的に水と共に生活してきた為、
水辺と断絶しないまちづくりとしたい

土木構造物のみでの津波対策は"石巻"にふさわしくない
『複合的防災対策による減災』により防災と魅力的なまちを両立

【複合減災の考え方】

大規模津波
…長期的に想定される規模。
まちづくり・建築等の工夫による確実な避難により、『いのち』を守る

高潮・小規模津波
…短～中期的に想定される規模。最低限の土堤で、『まち』を守る

まちづくりによる減災
□避難ルートの確保（通り庭の整備）
□街路構成の工夫（波を減衰する街区構成、水面の変化が見えるまちづくり）
□電線の地中化（災害時の緊急車両の通行を可能に）

建物による減災
□津波避難ビルを一定間隔ごとに配置
□外階段・屋上庭を備えた住宅・商店の整備

土木による減災
□高潮・小規模津波を受け止めるのに十分なだけの土堤を整備

ソフト面による減災
□津波を後世に伝える、情報ツールを活用

D.公共公益施設の集約・再配置を行う

〈課題〉
・浸水し、建替更新が必要な建物
・立地が悪く利用者が限定されている公共施設

公共公益施設を中心市街地に集約して再配置
⇒誰もが利用しやすい、住まいと一体となった公共施設整備
⇒市役所移転跡地など、未利用地の有効活用

C.明快なゾーニングで特色をひき出す

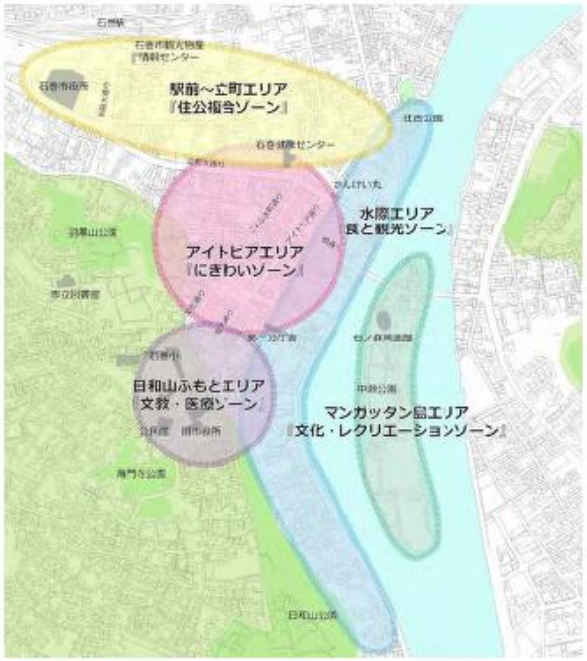
水際エリア 「食と観光ゾーン」
○石巻の魅力『食』を観光資源として活用
○水辺の豊かな景観と防災まちづくりの両立
○街の人も観光客も楽しめる新たな観光まちづくり
（水上バスでの観光ルート、歴史・文化の活用）
○河川沿いのオーベルジュ・宿泊施設などの充実

マンガッタン島エリア「文化・レクリエーションゾーン」
○石巻の復興シンボルとなるマンガッタン島の再整備
○こどもから大人まで楽しめて学べる夢の島づくり
（岡田劇場・ハリストス教会を含めた再整備の検討、
市民参加ワークショップによる教育効果）
○安全対策の徹底（橋の架け替え（歩専橋化））

駅前～立町エリア「住公複合ゾーン」
○駅を中心に公共施設・生活利便施設・
住宅等がコンパクトに複合した街づくり
○新交通システムによる環境に優しい街づくり
（パーク＆ライドを想定した駐車場再編、
街中の主要な場所を巡るコミュニティバス）

アイトピアエリア「にぎわいゾーン」
○街路がにぎわう、歩いて楽しい街づくり
○一定距離毎の共同津波避難ビル、
避難路確保と防災備蓄・非常電源確保
○水際エリアと相互補完の関係づくり
（親水空間に視線が抜け、河を感じる）

日和山ふもとエリア「文教・医療ゾーン」
○災害時の拠点として、学校・病院等は
安全な高台へ集約化して配置
○高齢者やこどもにやさしいまちづくり
（日和山へのバリアフリールートの整備、
明快でわかりやすい施設配置）



〈断面イメージ〉

5 建物の共同化でまちのコモンスペースを生み出す

154-3

5

課題

・街中には全壊・半壊建物が混在しており複雑な状況
・建替えの方法は、場所や地権者の意向等に合わせてきめ細やかに対応する必要

目標・方針

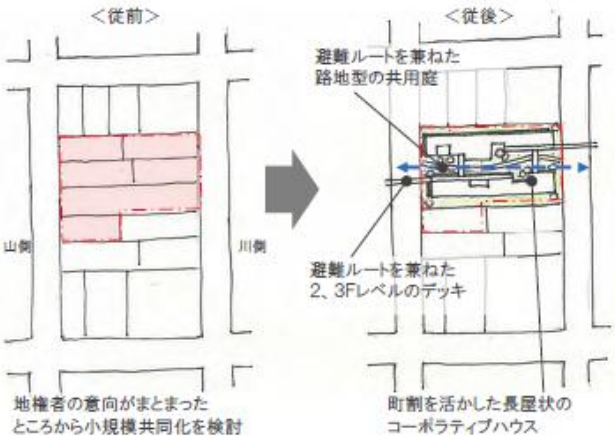
●小規模共同化によるコミュニティ空間（共用庭・路地・デッキ）の創造

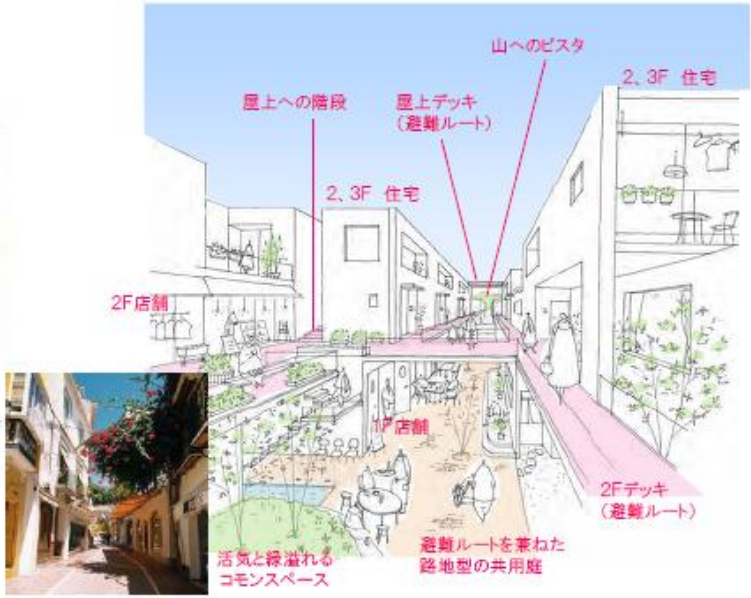
・地権者の意向がまとまったところから小規模共同化を図り、コミュニティの維持やまちのためにもなる空間づくりを行う
・土地を共有化することで、敷地内に避難ルートを兼ねた路地型の共用庭やデッキなどを生み出すことができ、まち全体の防災性向上にも寄与する
・向こう三軒両隣の関係性を保つことができ、こどもや高齢者などの災害弱者を地域で見守り助け合うことにも寄与する

●大規模共同化による複合機能の導入とオープンスペースの創出

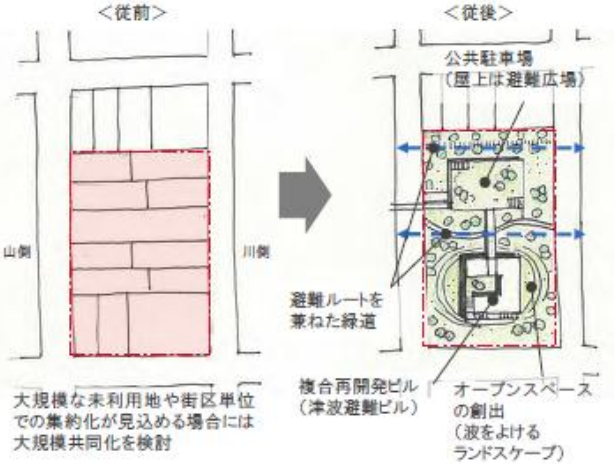
・大規模な未利用地がある場合や街区単位での集約化が見込める場合には大規模共同化を図り、複合機能の導入とオープンスペースの創出を図る
・住宅（地権者用＋α）、店舗、公益施設（図書館、文化センター、公共駐車場等）、その他（ホテル等）の導入を図り、複合再開発ビル（兼津波避難ビル）として整備
・多様な機能を誘導することにより、街中居住の推進や公共公益施設の集約化にも寄与する
・地上部はまとまったオープンスペースを創出し、日常時の憩いの場の創造や災害時の避難ルートを確保する
・屋上部は避難スペースを設けて津波避難ビルとしての機能を確保する

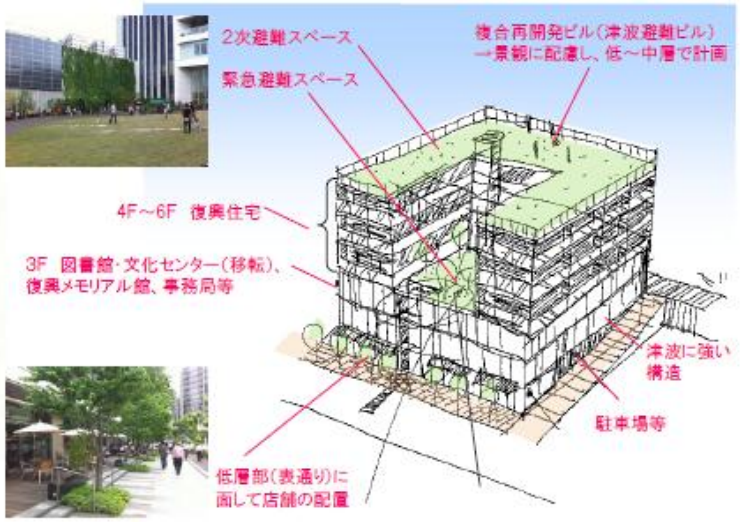
小規模共同化





大規模共同化（複合再開発ビル兼津波避難ビル）





7 復興のシンボルとして人々が集うマンガッタン島をつくる

154-4

7

課題

・中瀬は石ノ森萬画館以外ほとんど流され壊滅
・岡田劇場やハリストス教会などの文化的資産に影響
・平坦な土地であるため津波等への対策が課題

目標・方針

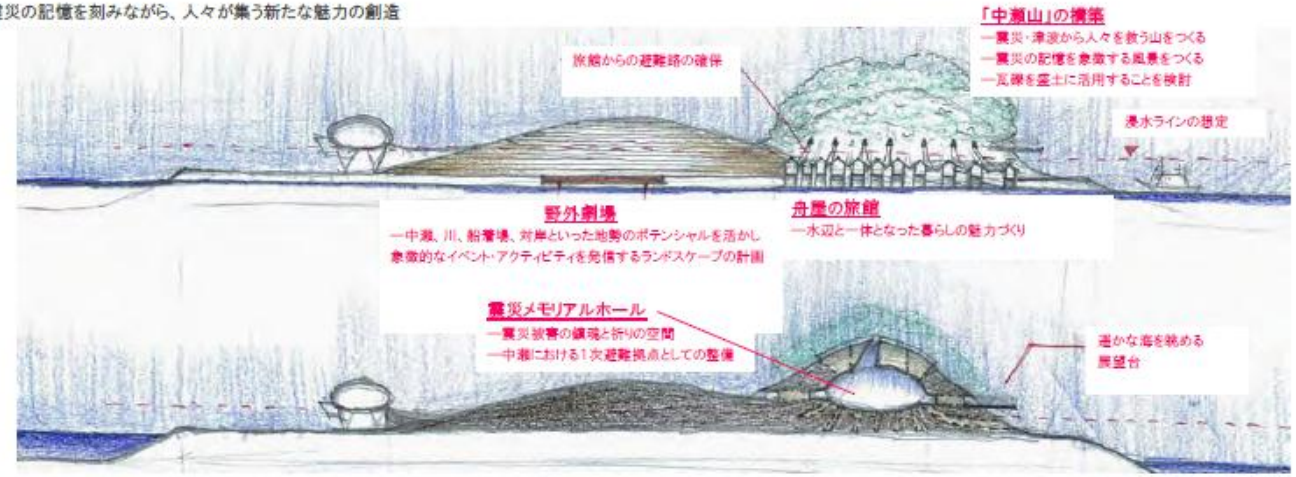
●こどもから大人まで楽しめて学べる夢の島づくり

・萬画館を中心とした文化発信拠点の整備
・中瀬と川岸が一体となった野外劇場
・舟屋の旅館（船で行き来する）
・中瀬山（内部は震災メモリアルホール）
・ハリストス教会の活用又は移築等の検討
・中瀬の環境を活かした教育の場づくり
（自然環境とのふれあい、災害・津波を学ぶ場）
・市民参加で島の姿を創りあげる
（こどもが描く夢の島絵画コンクールの実施／市民ワークショップによる島のデザイン検討／植樹と維持管理による島のマネジメント）

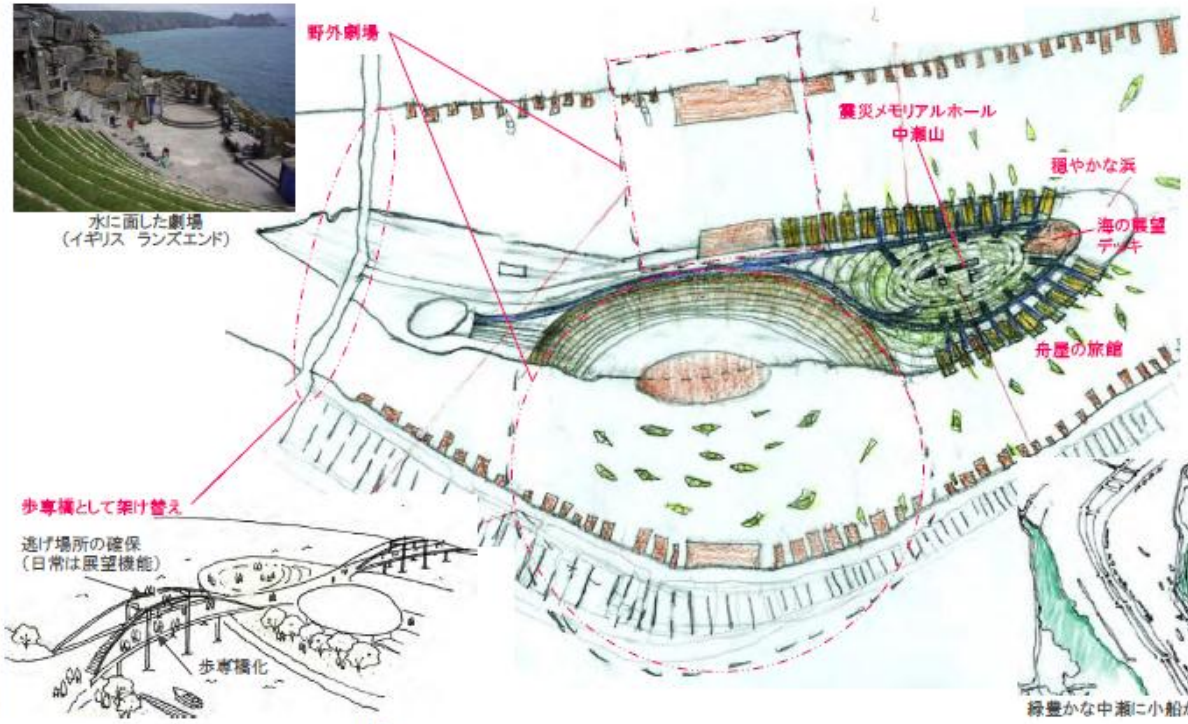
●中瀬の安全対策と防災性強化

・瓦礫を再利用して中瀬の一部を盛土化
・安全な橋として架け替え整備
・橋にはいざという時には逃げ場となる高さにスペースを確保
（日常時は海川山を眺められる展望機能）
・歩行者専用の橋（歩専橋）とし、災害時に車の渋滞で逃げ遅れることがないよう、歩行者優先の橋づくりを行う（ただし、緊急車両が通行できる幅員は確保する）

■震災の記憶を刻みながら、人々が集う新たな魅力の創造



水に面した劇場
（イギリス　ランズエンド）



瓦礫の利用を考える

緑豊かな中瀬に小船が集う、魅力的な景観をつくる